

広島県立歴史博物館

研究紀要

第24号



今中丹後「御中老格控」からみる広島藩重職の書状贈答料紙	石川良枝	1
闘茶について—闘茶札と文献資料から探るその具体像—	石橋健太郎	24
資料紹介—塩竈神社奉納額について—	伊藤大輔	51
「菅茶山」の姓名・号について—茶山・晋師・太中—	岡野将士	59
吉川興経の引退と毛利元春の家督相続	木村信幸	67
研究ノート 文化年間初頭に地方に伝わった北方図について～「松前えそ図」と 「従尾張国至蝦夷北極出地度量図」を事例に～	久下実	85
「山陽先生詩稿」訳注(一)	花本哲志	99
広島県立歴史博物館所蔵の雲華上人の書簡—翻刻と解題— 湯谷祐三 廣森美枝子		121
<hr/>		
福山市津之郷町出土の廃和光寺塔址出土遺物について	尾崎光伸	(1)

BULLETIN
Of
the HIROSHIMA PREFECTURAL MUSEUM of HISTORY

Vol.24

2021

Artifacts Excavated from the Ruins of the Abandoned Wako-ji Temple Pagoda in
Tsunogo-cho, Fukuyama City OZAKI Mitsunobu (1)

Mapping papers used in formal correspondence, traced from Onchūrōkaku-hikae	ISHIKAWA Yoshie	1
“Toucha” —Search of the concrete image to begin with a tea competition cards—	ISHIBASHI Kentarou	24
About “SIOGAMA shrine exvoto”	ITOU Daisuke	51
About the name of “KAN Chazan” and pen name—Chazan Tokinori and Tachu—	OKONO Masashi	59
About the inheritance of Kikkawa family by “MOURI Motoharu” and the retirement of “KIKKAWA Okitsune”	KIMURA Nobuyuki	67
Two maps of HOKKAIDO spread to local area in Japan in early BUNKA-period (approximately 1804–1808)	KUGE Minoru	85
Sanyou-Sensei-Si-Kou;translation and annotation;part1	HANAMOTO Satoshi	99
The letters of Priest Unge in the collection of the Hiroshima Prefectural Museum of History	YUTANI Yuuzou, HIROMORI Mieko	121

「菅茶山」の姓名・号について — 茶山・晋帥・太中 —

岡野 将士

はじめに

江戸時代後期、備後国安那郡神辺宿（広島県福山市神辺町）に私塾、黄葉夕陽村舎を開き、儒学者として教育に尽力するとともに、漢詩集『黄葉夕陽村舎詩』により漢詩人として全国に名をはせた人物が菅茶山（一七四八～一八二七）である。

菅茶山は、延享五年（一七四八）二月二日、父菅波樗平^①（諱は扶好）と母半の間に長兄として生まれた。幼名は百助、通称は久次郎といい、長じて通称を太中、名を晋帥とし、字は礼卿、茶山と号した。「茶山」という号は、神辺に所在する茶白山（現在の要害山）に由来している。頼山陽の「茶山先生行状」^②にも、号の由来を「茶白山あり、因りて自ら茶山と號すと記す。

ところで、基本的な問題として「菅茶山」は、どう読むのであろうか。辞典類には、古くは、「かん（クワン）さん」のみを載せている場合が多く^③、近年は、「かんちやさん」を項目とし、「かんさんととも」^④を附したもののや「かんちやさん」のみのものが多くなっている^⑤。

しかし、『備後史談』第十五卷九^⑥（昭和十四年）に収録される得能正通氏の「菅茶山と頼山陽」という講演記録によると、得能氏は「菅（すが）は菅

波を修したもので、我が地方では菅（かん）とはいわず、菅（すが）と呼んでおります。」「地方では茶山（さん）とは申しませぬ。」と述べ、当時、全国的に知られた読みと地元での読みの相違について触れている。また当館所蔵の「重要文化財菅茶山関係資料」（以下「菅茶山関係資料」とする）にも、「すが」と読んだ資料が収められている。例えば、小寺清先^⑦の和歌集『楢園集』の序文では「菅晋帥」と記しているが、その草稿^⑧には「すかのときのりしるす」とひらがなで記している。

本稿では、こうした事例を踏まえて、菅茶山の姓・字・名・号の読みについて、改めて考察してみたい。

一 号は「チャザン」か「サザン」か

まず、号である「茶山」について考察する。

地元神辺では、「カンチャザン」と呼ばれ親しまれている。また、前述したように神辺宿の南に聳える「茶白山」が号の由来であり、現在では「チャザン」の読みが主流となっている。一方、「カンサザン」という読みは、「茶山集」で知られる南宋の官僚・詩人であった曾幾の号「茶山居士」に倣った^⑨。あるいは「チャ」は慣用音であり、「山（サン）」との組合せは、唐音である

「サ」が正しいとする意見も古くからある。「茶」は、「サ」「タ・ダ」「ト」が、それぞれ呉音・漢音・唐音に分類されているが、「チャ」は慣用音に分類される。慣用音とは、本来の音とは違う、慣用的に用いられることで定着した音とされている。「チャ」という音は、平安時代末には日本に伝わっているが、分類すべき音がないため慣用音とされている。

では、菅茶山関係資料に手がかりを探してみよう。

茶山のことを「椽」山と表記するものが、「廣韻奉禱椽山先生芳看花見憶作」、「奉答椽山先生遊芳野山花下見寄書」⁽¹⁰⁾（写真1）と「謝椽山菅先生見寄題海昭閣之高作」⁽¹¹⁾がある。前者は、茶山と親しく交流した幕臣の岡本花亭が文政三年（一八二〇）に茶山に贈った作品、後者は、仙台の詩僧であった南山谷梁の作品である。『大漢和辞典』によると、「椽」の音に「サ」はない。漢音が「タ」、呉音が「ダ」である。「椽」と「茶」と共通する音は「チャ」である。『集韻』によれば、反切は「直加切」で、それに従えば、「直（zhí）」の頭子音と「加（jiā）」の頭子音を除いたものを組み合わせることとなり、「zha」となるからである。⁽¹²⁾

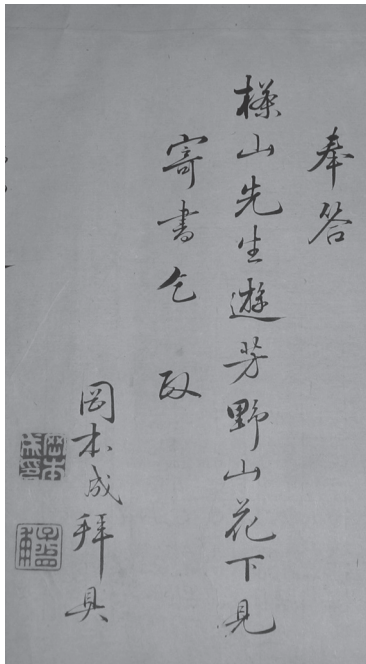


写真1 「奉答（椽山先生遊芳野山花下見寄書）」（部分）

また、茶山の門人であり、茶山の斡旋により尾道屋菅波家の当主となった菅波序平が晩年に口述筆記させた『菅波信道一代記』⁽¹³⁾前編卷之九では、明確に「茶山翁」とふりがながふられている。（写真2）これらのことから、「茶山」は「チャザン」と呼ばれていたことが明らかである。

二 「晋帥」・「礼卿」・「太中」について

次に、名の「晋帥」、字の「礼卿」、通称の「太中」の由来について、触れる。通称の「太中」は、未詳である。「晋帥」「礼卿」については、「茶翁口授」⁽¹⁴⁾には、「左僖廿七年晋文公謀元帥趙衰曰、郤穀可臣亟聞其言矣、説礼樂而敦詩書云々」と記され、『春秋左氏伝』僖公二十七年の記述を典拠としている。

「晋帥」の「晋」は、晋国、「帥」は元帥から、「礼卿」の「礼」は礼樂、「卿」は下軍の将のことである。

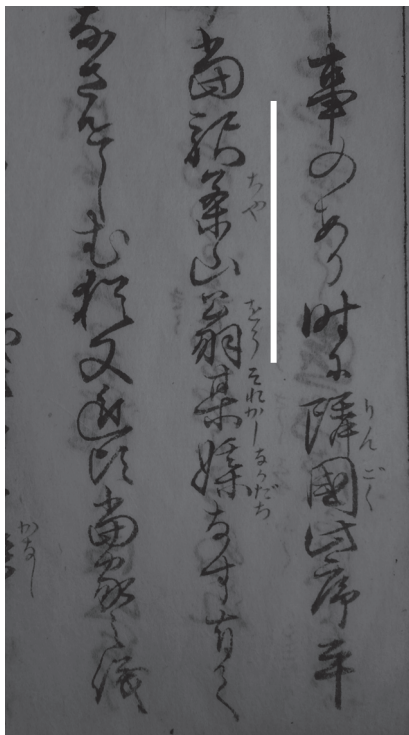


写真2 『菅波信道一代記』前編卷之九（部分）

『春秋左氏伝』の「僖公二十七年」のうち、茶山に関係すると思われる記述に触れる。

まず、「晋帥」は、晋公が三軍⁽¹⁵⁾を作り、誰を元帥⁽¹⁶⁾にするべきかを評議した時、趙衰が卻縠を推し、その理由を述べた部分に「礼楽を説^{よつこ}んで、詩書を教^{たつと}ぶ。詩書は義の府^{くわ}なり。礼楽は徳の則^{のり}なり。徳義は利の本^{もと}なり。夏書に曰く、賦納するに言を以てし、明試するに功を以てし、車服は庸を以てす。」と記している。これにより、晋公は、卻縠を中軍の将とした。

ここには、茶山の生涯を貫いた自身の理想のあり方が含まれていると考えられる。具体的には、礼楽を愛好し、詩書を尊重するということである。詩は『毛詩』(『詩経』)、書は『尚書』(『書経』)を指す。詩書は、人の行うべき正しい道である義が収蔵される府(庫)であり、義の全てが詩書の中にある。また、礼楽は徳の法則であり、その徳の義があれば、利は自ずから随順すると説いている。

つまり、卻縠が、「礼楽を好み、詩書を重んずることが、晋の元帥となることに不足のない人物」といつている。茶山自身が、読書を好み、礼楽を重んじる態度であったことは、すでに知られていることである。

本題の読みであるが、「はじめに」で触れた「檀園集序文章稿」、茶山が礼楽のおこり、社会的効用等を説いた「冬の日かげ」⁽¹⁷⁾には、ひらがなで「ときのみ」と記している。「礼卿」は、先に触れた典故から、「レイケイ」と読まれるのであろう。通称の「太中」は、「書状断簡」⁽¹⁸⁾に、「タチウといふなるべし、あれはタイジウと可申事也」とあることや、「太仲」「多仲」と記されている例から「タチチュウ」であることが分かる。

三 「菅」の読みについて——「カン」か「スガ」か

菅茶山の父菅波樗平は、神辺東本陣を営む本荘屋菅波家から分家した⁽¹⁹⁾。茶山は、江戸時代の儒学者の例にもれず、「菅波」の姓を、中国風の一字表記の「菅」へと変え、漢姓を名乗ったとされ、現在に至るまで菅家である。前述の辞典類には、「かん」「クワン」と記されている。ちなみに「クワン」は漢音である。

しかし、一方で、「すが」と発音した例が菅茶山関係資料から確認できる。筆者が確認したものは、次のとおりである。

① 『檀園集』序文章稿〔著述稿本類 272〕
「すかのときのりしるす」

② 覚(魚介類代勘定)〔文書記録類 323〕

【宛名】「菅野太仲様」

③ 覚(なべつる・くろかね売渡)〔文書記録類 324〕

【宛名】「神辺すが様」

④ 覚(メ拾六分領収)〔文書記録類 333〕

【本文】「須賀多中様」

⑤ 覚(印判料領収)〔文書記録類 336〕(写真3)

【宛名】「須賀太仲様」

このいずれも、読みは「すが」である。②～⑤の「覚」は、「菅野」(すがの)と記されている。③は、「すが様」と明確に記しており、④と⑤は、「須賀(すが)太中(仲)」と記され、音に漢字を充てたものである。これらの資料からは、「すがのたちゅう」「すがのときのり」が確実に使用されていたことが

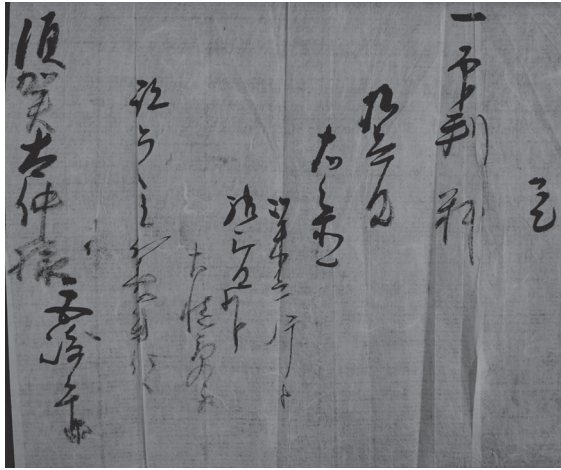


写真3 覚（印版料領収）

菅茶山関係資料のうち、茶山のもとに寄せられた書状類、書画類には、「菅」と記されるものも少数ながらある⁽²¹⁾。「菅」「管」の両者に共通する音は「かん（クワン）」であることから、「管」は「かん」と発音されていたと考えられる⁽²²⁾。これらのことから、茶山と交流を持っていた文人たちは「かんちやざん」の発音と認識していた可能性が考えられる。

分かる。
さらに、前章で触れた『菅波信道一代記』と内容をほぼ同じくする『菅波老父一代記』⁽²⁰⁾の巻二には、「菅乃翁^{すか}」と「菅^{をきな}」に「すが」とルビがふられた箇所がある。（写真4）
茶山の門人でもあり、後に菅波一族となる信道の一代記に明確に記されていることから、「菅（すが）家」であったと考えるのが妥当であろう。
明治以降、「かん」から「すが」に改めたのではなく、茶山の時代から「すが」家と認識されていたのである。では、「かん」と「すが」の違いは何であろうか。

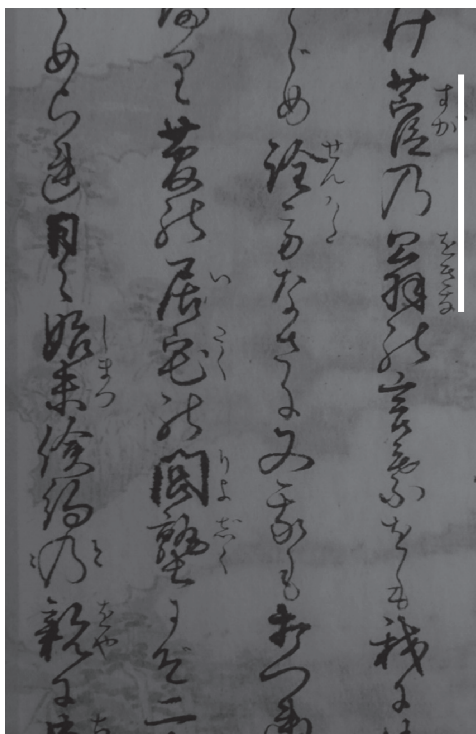


写真4 『菅波老父一代記』巻二（部分）

菅家は、前述のとおり「菅波」を「菅」とした。これは、菅波家の祖である畠山氏が、菅原道真の霊夢を見たことから、菅波に改姓したとされる。道真は、「すがわら」であるが、「かんこう」「かんじょうしょう」と尊称でも呼ばれる。
茶山の場合も、「かん」は漢詩人「かんちやざん」として漢詩の世界で通用した可能性が高いのではないだろうか。「管」と表記された資料のうち、名・通称・号などと組み合わせられる場合、その多くは「茶山」と組み合わせられる。一方「菅」の場合、多くは「太中」「晋帥」と組み合わせられる。と認識されていたと考えられる。

四 菅(すが)家の始まりはいつか

茶山が姓を改めたことは、『菅波信道一代記』巻八の菅波一族の系図に次のように記されている。

時ニ福山ヨリ召抱ニ相成リ儒官トナル。姓ヲ菅ノ一字ニ相改宗旨別改家中トナル。

本家弟圭治ニ譲リ相続ヲナサシム⁽²³⁾。

福山藩の儒官になって姓を「菅ノ一字」に改め、「家中」となったため、「本家」を弟に譲ったとある。茶山が、儒官となるのは、享和元年(一八〇一)である。「菅太中」「菅晋帥」「菅礼卿」といった記述は、寛政四年(一七九二)以前の遊学時代からすでに使用されている。

では、公的にはいつ使用されたかであるが、『福山市史』に掲載されている「藩庁日記」⁽²⁴⁾の雑事の項目に、「(寛政五年)六月十七日 一 菅太中、米屋町にて一ヶ月両度ツツ講釈仕候事」と記されている。また、「阿部家分限帳」⁽²⁵⁾には、御用医師として「五人扶持 川北村 菅太仲」と記されている。この分限帳の原本は失われており、筆写本であるが、原本の成立年代は、寛政十二年(一八〇〇)頃とされる。茶山が儒官となり、藩校弘道館へ出講する前である。

享和元年に、「菅」と改姓したとする『菅波信道一代記』の記述と齟齬が生じている。これは、「福山藩から扶持をもらったこと」と「儒官となったこと」を混同しているのではないだろうか。その理由として、作者の菅波序

平(信道)が茶山の門人となるのは、文化四年(一八〇七)以降のことであり、茶山はすでに儒官となっており、「菅」を名乗っていたため、上記のような記述になったと思われる。

茶山の福山藩との関係を示す覚書である「菅茶山履歴覚書」⁽²⁶⁾の記述は、「寛政四子八月廿六日 五人扶持被下置」から始まる。⁽²⁷⁾分限帳に御用医師として記載されるのであれば、「家中トナル」ことであろう。

それを示すように富士川英郎氏が『菅茶山』⁽²⁸⁾の中で『萬波醒廬日記』が紹介されている。寛政四年九月五日の項に、筑前の藩儒亀井南冥が塾居謹慎となった記事に続き、「備後州神辺の隠士菅太仲、姓を称し、帯刀することと許され、月俸五口を福山侯に賜る。」と記されているのである。以上のことから、寛政四年に公的に「菅家」と名乗り、実家(新宅)の当主を弟の圭二に譲ったのである。茶山は藩士となり、廉塾の塾主(世話人)として、建前上は別家をした形となったのである。

茶山の実家「上本庄屋菅波家」の当主は、弟の圭二⁽²⁹⁾(恥庵)、甥の養助⁽³⁰⁾(万年)、姪孫の菅三⁽³¹⁾(自牧齋)が引き継いだ。

この菅三が、文政十年(一八二七)の茶山の死去と同日に、茶山の養子となり、「菅家」を嗣いだたため、実家の菅波家は絶家となり、塾主としての「菅家」が残った。菅三も、弘化三年(一八四六)には、「菅(すが)」と名乗っていることも確認できる⁽³²⁾。

こうした経緯で、漢詩という世界での「かん」と、家としての「すが」の混同が起きたのではないだろうか。

おわりに

ここまで、「菅茶山」の姓・名・号について、検討した結果は次のとおりである。

- ① 号の「茶山」は「ちゃざん」と発音されること。
- ② 名は「ときのり」、通称は「たちゅう」であること。
- ③ 姓の「菅」は、家としては「すが」であったこと。
- ④ 「かんちゃざん」は漢詩の世界で通用したものであること。
- ⑤ しかし、「菅(すが)」を公的に使用し始めた時期は、寛政四年(一七九二)に五人扶持を下賜された頃であるが、私的に使用し始めた時期は確定しきれなかった。その解明には、「新宅」(実家)と「塾」(茶山が別家した形)の関係を紐解く必要があると考えている。

【注】

- 1 菅波樗平(一七二七〜一七九二)は、名を扶好、通称を久助、芦丈・樗平と号した。茶山の実父である。川北村(福山市神辺町)の高橋家の人で、本荘屋菅波家に養子入りし、四代目を継いだ。後に分家して上本荘屋と号した。文芸は、主に俳諧を嗜んだ。
- 2 『黄葉夕陽村舎詩』遺稿附録 天保三年
頼山陽(一七八〇〜一八三二)は、名を襄、字は子成、通称は久太郎、山陽と号した。茶山の親友である頼春水の子。文化六年末から八年にかけて、廉塾の都講を勤めた。『黄葉夕陽村舎詩』を批正とともに、出版にも関わった。
- 3 『日本人名辞典』第三版 参文舎・積文社 明治三十九年

- 『角川日本史辞典』第二版 角川書店 昭和六十年
- 『広辞苑』第二版第九刷 新村出編 岩波書店 昭和五十年
等は「カンザン」のみの記述である。
- 4 『広辞苑』第七版 新村出編 二〇一八年 岩波書店
- 5 『日本近世人名辞典』二〇〇五年 吉川弘文館
- 『日本史大辞典』第二卷 下中博編 平凡社 一九九三年
- 『国史大辞典』第三卷 国史大辞典編集委員会 昭和五十八年 吉川弘文館
- 6 『備後史談復刻』芸備郷土誌刊行会 昭和四十五年
- 7 小寺清先(一七四八〜一八二七)は、通称を常陸介(後に典膳、楢園等と号した。笠岡陣屋稻荷社の祠官をつとめた。寛政十年には、笠岡代官の早川正紀が設立した郷校・敬業館において教育にも従事した。『楢園集』は、清先の和歌集で、文政六年に刊行された。茶山は、清先の依頼を受け、序文を寄せている。
- 8 重要文化財菅茶山関係資料 著述・稿本類272刊本では「菅普帥しるす」となっている。
- 9 『山村蘇門―近世地方文人の生涯―』今田哲夫 郷土出版社 昭和六十三年
177ページ
- 10 重要文化財菅茶山関係資料 書画類195
- 11 重要文化財菅茶山関係資料 書画類185
- 12 『大漢和辞典』修訂版第十刷 大修館書店 平成二年
- 13 『菅波信道一代記』は、尾道屋菅波家の当主である菅波信道(一七九二〜一八六八)が晩年に口述筆記させた自叙伝である。広島県重要文化財に指定されている。信道(幼名は浅之丞)は、医学を志し、廉塾に入塾する。しかし、茶山から学問には不向きであるとして、尾道屋菅波家の養子となるよう勧められ、文化九年(一八

一二)に入室した。茶山との関係からして、確実に「茶山」と呼ばれていたことが分かる。

14 黄葉夕陽文庫資料 J013-055 「茶翁口授」は、『黄葉夕陽村舎詩』前編及び後編の語句解説。

15 上・中・下の三軍を作るのは、大国の制度である。

16 中軍の将をいい、三軍の全てを統率する。

17 『広島県史』近世資料編IV 一九七六年 189ページ

18 黄葉夕陽文庫資料 J009-085 この書状には、漢字の音についてのやり取りが記されている。長崎の高松弥六という人が、音について、茶山の門生に対し、「第一ソチノ先生か名ヲ一ツの音の通りニ守よまぬ事と申候て、タチユウといふなるへし、アレハタイジウと可申事也」といったという。差出人は不明であるが、音の通りに読めば、「タイジユウ」であるのに「タチユウ」と発音していたことが分かる。この書状からは、江戸時代の名や号が、正しい音で必ずしも使われていたとは限らないと推測できるものである。

19 尾道屋菅波家の当主・菅波序平が口述筆記させた『菅波信道一代記』前編巻之八に、一族の系譜が記されており、実家(新宅)は、「上本荘屋長作世代之大略」として、「初代 菅波久助扶好」、二代 菅波太中」と記されている。それとは別に、「上本荘屋一ノ分家」として「紅葉夕陽村舎世代之大略」として、「初代 菅波太中」、二代 菅三郎」となっている。

20 『菅波老父一代記』は、『菅波信道一代記』とはほぼ内容・挿図等を同じくしている。それぞれの「目録」に記される一ツ書の項目は、それぞれ一九四項目と一八四項目である。

21 書状類541の「日謙書状」の封書に「神辺管茶山先生様侍史下」、書画類11の「蹊

蹊餌図」には谷文晁が「写祝 管茶山先生七十晋 文化十丑初夏会九 文晁」と記している例がある。この二例は、「茶山」との組合せである。唯一、「管太中」と記される例が、書画類202の「赤崎海門書状」がある。これについては、改めて検討したい。

22 ただし、「菅」の「官」は「管に通じて、くだの意味。茎がくだ状になっているすげの意味を表す」とされ、「すげ」は「すが」ともいうという点も押さえておきたい。

23 「菅」家は、「菅波」家の分家である。本家は「本荘屋」という屋号で本陣役を勤めた。茶山の父樗平が「本荘屋」から分家して、「新宅」(上本荘屋)となった。この時の当主は父樗平である。茶山は、安永二年(一七七三)頃、新宅の当主となり、樗平は隠居した。寛政三年(一七九一)に本格的に塾を始めた茶山は、弟の圭二に家を譲り隠居した。隠居した時期は、寛政四年(一七九三)頃と推定される。この家督相続については、茶山が家督を譲る際に認めた「庭訓」(黄葉夕陽文庫資料からもうかがえる。この「庭訓」は、家督相続に当たって、当主の心得等を記したものであるが、茶山が当主であった時期の出来事についても記している。「天明の一揆」「弟猶右衛門の死去」「京都遊学」等が記されている。寛政二年に最初の塾建物を建てた「土手ふしん」も記されているが、下限は、寛政三年の「親仁様死去」である。「親仁様死去」は、父樗平の死去である。父の喪に服している間に、家督相続が行われるとは、考えにくく、喪が明けた寛政四年以降に家督相続と考えるのが妥当であろう。

24 『福山市史』近世資料編II 教育・文化・宗教 福山市 平成二十四年 293ページ

25 『福山市史』近世資料編I 政治・社会 福山市 平成二十三年 47ページ

補注に、「西備名区『備後叢書』では寛政末年となっているが、記載される軼奉
 行の在職期間から寛政末年（十二年）であろう。」としている。

26 重要文化財菅茶山関係資料 文書・記録類279

寛政四年から文政三年までの履歴を簡条書きにした記録である。

27 この寛政四年の五人扶持が与えられたことについては、頼山陽「茶山先生行状」
 『黄葉夕陽村舎詩』遺稿附録』に林大学頭と阿部正倫のエピソードが知られて
 いる。そのため、漢詩人として茶山が評価をされたとされるが、塾の開塾と福山藩
 からの扶持米は、無関係とはいえない。正倫が、茶山の行状を調べさせたところ、
 「学行兼茂の状を得」た。つまり「学問とその行いが共に優れている」という報告を
 受けたので「五人扶持を与えたのである。」

28 『菅茶山』 富士川英郎 福武書店 一九九〇年 上巻 287ページ

寛政二年に始まる「寛政異学の禁」の影響が、各藩へ広がりつつある状況を示し
 ている。

29 菅圭一（二七六八〜一八〇〇）は、名を晋玉、字は信卿又は圭二、恥庵と号し
 た。茶山の末弟である。天明二年（一七八二）に西山拙斎に学び、その後、京・大
 坂・長崎に游学した。寛政十年（一七九八）に京で塾を開いたが、同十二年に病没
 した。

30 菅養助（二七七三〜一八一二）は、名を万年、字を公寿、養助、後に長作と称
 した。茶山の弟の子で、甥に当たる。圭二が京へ出た寛政十年に、その跡を嗣いだ。
 天文学に関心を持っており、菅茶山関係資料に天文関係の資料を多く残している。
 31 菅三郎（二八一〇〜一八六〇）は、名を惟繩、字は昭叔、通称は菅三、三郎、
 自牧斎と号した。養助と茶山の姪である敬の子。

32 『菅波信道一代記』卷之十六には、弘化三年（一八四六）菅波家の祖畠山道元の
 二百年家祭に参加した「菅三郎」に「すが」とルビがふられている。

執 筆 者

石川 良枝	広島県立文書館文書等整理従事員
石橋健太郎	広島県立歴史博物館学芸課主任学芸員
伊藤 大輔	広島県教育委員会事務局管理部文化財課主任
岡野 将士	広島県立歴史博物館学芸課主任学芸員
木村 信幸	広島県立歴史博物館学芸課長兼草戸千軒町遺跡研究所長
久下 実	広島県立歴史博物館学芸課主任学芸員
花本 哲志	広島県立歴史博物館頼山陽史跡資料館主任学芸員
湯谷 祐三	愛知県立大学非常勤講師
廣森美枝子	小牧市古文書調査会会員
尾崎 光伸	広島県立歴史博物館草戸千軒町遺跡研究所主任学芸員

広 島 県 立 歴 史 博 物 館 研 究 紀 要 第 24 号

BULLETIN of the HIROSHIMA PREFECTURAL MUSEUM of HISTORY Vol.24

発 行 日 令和 3 年 9 月 30 日

編集・発行 広島県立歴史博物館
Hiroshima Prefectural Museum of History
〒720-0067 広島県福山市西町 2-4-1
2-4-1 Nishi-machi Fukuyama City Hiroshima Prefecture
720-0067, Japan
Tel.084-931-2513 Fax.084-931-2514

印 刷 株式会社カオス

